

令和3年度 入学者選抜試験問題

国 語

〔100点〕
〔50分〕

実施日：令和2年12月3日（木）

※ 下記の〈注意事項〉をよく読み、監督者の指示があるまで開かないこと。

〈注意事項〉

— 開始前 —

1. 試験時間は10：20～11：10の50分であり、途中退室は認めない。
2. 監督者の〈開始〉の指示があるまで、この問題冊子の中を開かない。
3. 解答用紙には、解答欄のほかに、受験番号、氏名の記入欄があるので、下記を参照し記入・マークすること。
 - 受験番号欄** 上段に受験番号を記入し、さらにその下のマーク欄にマークすること。
 - 氏名欄** 氏名・フリガナを記入すること。
4. 解答用紙に**汚れ**がある場合には、挙手で監督者に知らせること。

— 開始後 —

1. この問題冊子は**22ページ**である。確認してページの**落丁**、**乱丁**、**印刷不鮮明**等がある場合は、挙手で監督者に知らせること。
2. 解答は、すべて解答用紙の所定の欄への**マーク**によって行うこと。
例えば

40

 と表示のある問いに対して ③ と解答する場合は、次の(例)のように解答番号40の解答欄の③にマークする。

(例)

解答 番号	解 答 欄				
	1	2	3	4	5
40	①	②	●	④	⑤

3. **マーク**は**HB**の鉛筆で行い、所定欄以外にはマークしたり、記入したりしないこと。
4. 解答用紙は**汚したり折り曲げたり**しないように特に注意すること。
5. 訂正は、消しゴムであとが残らないように**完全に消し**、**かすが残らない**ようにすること。
6. **質問等**がある場合は、挙手で監督者に知らせること。ただし、問題に関する質問は受け付けない。

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1～9)に答えよ。

脳は、生まれ落ちた時から、生きるうえで重要な報酬が得られるように、神経回路網のつなぎかえを行っている。たとえば、お母さんの声がすると、やがてミルクをもらえるという経験を積み重ねることで、赤ちゃんの脳の中で、ミルクの味、お腹が空くこと、お母さんの声、要求が満足されることへの期待といった情報処理を行う神経細胞の結合パターンが変化していく。このような神経細胞の結合の変化が、すなわち学習である。

人間の場合、何が、生きるうえでもっとも大切で、切実な報酬であるかはハッキリしている。人間にとって、もっとも大切な報酬は、自分が所属する社会の構成員である他者からどのように評価されるかということである。文明が発達し、一人の人間が生きていけるかどうかを決めるもっとも重要な要素が、自然環境への適応から、社会における他者からの評価へと変化した人間においては、このような報酬の構造は自然である。

他者からの評価がもっとも大切な報酬であること、そして、そのことが、一人ひとりの心のあり方に多大な影響を与えることは、人間が社会的な動物であることを熟知した成人においてよりも、(a) ^A そのようなことを十分に意識、言語化していない乳幼児においてこそ純粹かつ強烈な形で現れる。 大人になって、スレてしまい、人前でしゃべることに何の緊張も感じなくなった人も、子どもの頃を思い出せば、大勢の人の前に立って膝ががくがくふるえ、声がかすれた経験が必ずあるはずである。

人は、常に何者かである「ふり」をしている。世界に対して、ある特定の心的程度を持つてのぞんでいる。人が、そのように一日中何者かである「ふり」をして過ごすのも、幼児期からの、他者からの評価を何よりも重要な報酬として認知プロセスを発達させてきた長い歴史を受けてのことである。

人間にとって、他者の存在がどれほど大切であるかは、自分の幼少期のさまざまな体験を振り返ってみればわかる。私自身、子どもの頃を振り返ると、あの頃にこそ、他者からの評価を切実な報酬として大切に感じるといふ脳／心の働きがもっとも純粹な形で出ていたように思う。幼少時を振り返れば、他者とのかわりを切実に感じるという私たちの属性が純粹な形で取り出せる。個人の歴史にお

ける「心の考古学」の中に、人間の発達における他者の存在の重要性を考えるためのヒントが隠されているのである。

乳幼児においては、しばしば、「大人に見られていること」自体が報酬となる。

「子どもにとっては、見られていないことは、起こっていないのも同じである」

という警句がある。見られていなければ何をやってもいいという意味ではない。子どもにとっては、何かをうまくやっているところ、新しいことに挑戦しているところを大人に見てもらうことが、何よりも強くかけがえのない報酬になるということである。

たとえば、真夏のプールの飛び込み台の先頭に、女の子がいる。その女の子が、後ろにたくさん子どもが並んでいるにもかかわらず、「ママ、見て、見て！」と叫んでいる。そして、プールサイドにいて他のことに気をとられていた母親が自分の方を向いてから、ようやく飛び込む。女の子にとっては、自分の母親が見ていてくれなければ、せっかく飛び込んでも飛び込んでいないのと同じなのである。

(b)、小学校の学芸会の自分の出番が来る前に、両親が見に来ているか心配で仕方のない男の子がいる。いよいよ出番が近づいてきて、舞台のそでから、一生懸命背を伸ばして客席をのぞき込む。やっと二人を見つけて、安堵する。男の子にとっては、せっかくの台詞も、演技も、両親が見ていないのであればやらないのと同じことなのである。

自分自身が、子どもの頃に、大人に向かって「ねえ、見て、見て」と言ったことがあるのを記憶している人、あるいは、周囲の子どもがそのようなことを言っているのを聞いたことがある人は多いだろう。《1》

「子どもにとっては、見られていないことは、起こっていないのも同じである」という警句は、言い換えれば、「見られていなければ、『社会的に』起こっていないのも同じである」ということである。人間にとって、何かが起こるということは、それが「社会的に」起こることとであり、そのことが、もっとも純粹に現れるのが、子どもの頃になかば無意識に感じる他者の視線なのである。「子どもの成長を見守る」という表現が使われるが、子どもにとっては、文字通り、大人に見られていること自体が一つの報酬になるのだ。泣いたり笑ったりするということは、子どもにおいて、大人よりも頻繁に見られる感情の表し方であるが、ここにも、「他者に見られている」という意味での社会性が深くかかわってくる。

《2》

子どもが、道端で転んでひざをすりむき、血がにじんでくる。そのまま泣かずに一人で家まで帰って来るが、母親の顔を見た瞬間に

泣き出す。このような現象は、しばしば見られる。

私たちは、こんな時、「母親の顔を見て安心して泣きたくなったんだね」などと形容するが、子どもがこのような行動をとるのも、泣くという行為がそもそも社会的にしか存在しえない行為、他者に見られることによってはじめて意味を持つ行為だからである。

子どもが泣くのは、他者である大人に助けてもらいたい、なぐさめてもらいたいからである。一人で道を歩いている時に転んで、いくら痛くても、そこに他者が存在しないのならば、泣いても仕方がない。(c)、そのような計算を子どもが必ずしも意識してやっているわけではない。子どもは、泣くという行為が、保護者たりうる大人の視線に見守られることを前提にはじめて意味を持つものであることを (I) に知っているのである。

《3》

生まれたばかりの乳児が、大人がほほえむとほほえみ返す能力を持っているという報告がある。人が生涯で体験するおそらくもつとも強烈な「笑い」の誘因は、幼少時に人にくすぐられることである。大人にくすぐられて、自分でもコントロールできないくらい強烈な笑いの発作に襲われた記憶は、誰にでもあるだろう。自分で自分をくすぐってもくすぐったくないことを考えてもわかるように、くすぐりもまた、私たち人間にとつての他者の存在の強さを表す現象である。単純な (II) 反応にも見えるくすぐりによる笑いは、実はきわめて (III) な笑いなのである。

大人になつても、笑うことは泣くことに比べれば頻繁にある。コメディ番組で、笑い声を音声として入れておくと、視聴者もまた笑いやすくなる。この経験則は、アメリカのテレビ・プロデューサー、チャールズ・ダグラスが偶然に見出したと言われている。人は、他人がいるという状況において、はじめて笑うという「ふり」(心的態度)へと移入する。大人にとつても、他人に見られている、他者がそこに存在するという文脈は、笑いはじめとするさまざまな行為がそもそも「社会的に」存在するための必要条件なのである。

《4》

他者の視線は、必ずしも正の報酬として機能するとは限らない。場合によつては、他者からの否定的な評価が、自分の存在をおびやかす脅威になることは、私たちの誰もが知っていることである。

他者からの否定的な評価が私たちの心に及ぼす影響を考えるうえでも、自分の子ども時代の体験を振り返る「心の考古学」が有効で

ある。他者の評価の切実さは、そのようなものを熟知して対処する術を知った成人よりも、幼少時において、より純粹かつ痛切な形で現れるからだ。

(d)、ものごころついた子どもにとって、「他人と違う」と他者から認知されること、あるいはそのように認知されていると想像することは、ときに、いても立ってもいられないほど強烈な心理的プレッシャーになる。

誰にでも覚えがあると思うが、学校に他の子と少し違う服を着せて行かされたり、遠足の時に弁当を広げたら、自分だけ海苔弁当で他の子はみなサンドウィッチだったり、あるいは、筆箱が、他の子は皆キャラクター付きの新しいものなのに、自分だけお下りの布製だったりすると、それが気になって仕方がない。冷静になって考えてみれば、他人は自分が思うほど自分のことを気にかけてはいないものであるが、何か自分に関して変わったことがあると、(e) 周囲の子の目がすべて自分に集中しているかのようなプレッシャーを受けるといふ記憶は誰にでもあるはずであろう。

「違う」ことが気になるといふ気持ちは、自分自身や自分の持ち物だけでなく、自分と関係していて、自分と「一体」のものと同者からみなされてしまうような人物に対しても及ぶ。たとえば、自分の親と一緒にクラスメイトに会うのは、誰でも気恥ずかしいものである。特に、親が普通とは違う服を着ていたり、変わったふるまいをしたりすると、自分のことではないのに、恥ずかしい思いをする。授業参観の時に、自分の親がどのような格好をして来ているかということが気になって仕方がないという体験は誰にでもあるはずであろう。《5》

このようなことは、他者の目を比較的強く気にするとも言われる日本の社会に特有の現象なのかといえ、そうでもないようだ。たとえば、この章の冒頭で紹介したアメリカ人へのアンケート結果について教えてくれたフランス系アメリカ人の研究者は、子どもがある時期、親である自分が友人の前でフランスなまりの英語をしゃべるのをとてもいやがったと言っている。「なぜ、うちのパパは他の子のパパと同じようなマトモな英語をしゃべれないの？」というわけである。

以上のようなことを考えても、また、他のさまざまな日常生活の体験を考えても、人間にとって、自分が何者であるかという認識は、徹底的に他者の視線を前提にしたプロセスであると言える。成人になって、個が確立したように思われる場合にも、私たちの自己の認識は、他者との関係によってかなり左右される。さらに突き詰めれば

X

とさえ言えるくらいである。

私たちは、成人した後は多かれ少なかれ「本当の自分」という個が確立していると考えがちである。しかし、実際には、他者との関係性によって、まるで魔法のように新しい自分が生み出されるといふ現象は普遍的に見られる。関係性の数だけ自分があると言っても過言ではない。一つの「ふり」からもう一つの「ふり」へと切り替わる時、そこに新しい自分が生まれるのである。

（茂木健一郎 『意識とはなにか―〈私〉を生成する脳』より）

問1 本文中の（ a ） ～ （ e ） に入る語句として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つずつ選びなさい。ただし、それぞれ一度しか使えない。

解答番号は（ a ） 、（ b ） 、（ c ） 、（ d ） 、（ e ）

- ① もちろん
- ② むしろ
- ③ たとえば
- ④ あたかも
- ⑤ あるいは

問2 本文中の（ I ） ～ （ III ） に入る語句として最も適切なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は（ I ） 、（ II ） 、（ III ）

- I
 - ① 生理的
 - ② 普遍的
 - ③ 社会的
 - ④ 心理的
 - ⑤ 本能的
- II
 - ① 経験的
 - ② 物理的
 - ③ 身体的
 - ④ 化学的
 - ⑤ 機能的
- III
 - ① 社会的
 - ② 打算的
 - ③ 一般的
 - ④ 意識的
 - ⑤ 社交的

問3 次の一文は、本文の《1》～《5》のいずれかから抜き出したものである。文が入る箇所として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 解答番号は **9**

笑うことも、泣くことと同様に他者の視線を前提にした、社会的な行為だ。

- ① 《1》 ② 《2》 ③ 《3》 ④ 《4》 ⑤ 《5》

問4 傍線部A「そのようなことを十分に意識、言語化していない乳幼児においてこそ純粹かつ強烈な形で現れる」とあるが、その理由として、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 解答番号は **10**

- ① 大人になるとスレてしまい、人前でしゃべるということに何の緊張も感じなくなってしまうことが多いが、子どもの頃は、何者かの「ふり」ができず、大勢の人の前に立つと膝ががくがくふるえ、声がかすれてしまうから。
- ② 大人は他者の評価が自分の心に及ぼす影響を熟知して、対処する術を知っているが、子どもは他者の評価がどの程度自分の心のあり方に影響を与えるのかという知識やそのことに対処する術がないから。
- ③ 脳は生まれ落ちた時から、生きる上で重要な報酬が得られるように学習を重ねていくが、乳幼児期の脳は赤ちゃんの脳のように、欲求が満足されることへの期待が大きく、他人の評価を大人よりも重要視しているから。
- ④ 乳幼児期は、社会の構成員であるという自覚がまだみられないため、生きるうえでもっとも大切で、切実な報酬が他者からの評価であることを、社会的な意味で十分に理解していないから。
- ⑤ 人間が社会に属する構成員である以上、成人は関わる人の人数が多くなるが、乳幼児の場合は、自分を評価する人間の数が圧倒的に少ないため、評価されることが非常に濃厚な経験として記憶に残るから。

問5 傍線部B「心の考古学」とあるが、これは具体的にどのようなことを指しているのか、最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は

11

- ① 発掘作業により古い時代を研究する考古学のように、幼少期の子どもたちの心の深層に迫ることで、他者の存在の重要性をあぶりだすこと。
- ② 幼少期に欲求が満たされることで神経細胞の結合パターンが変化してきたことを、考古学の発掘のように一つひとつ掘り出すこと。
- ③ 他者からの評価を何よりも重要な報酬として認知プロセスを発達させてきた人類の長い歴史を、考古学の視点からとらえなおすこと。
- ④ 出土した遺物や発掘した遺跡から古い時代の生活文化を考察する考古学のように、自分の子どもの頃の心を振り返ってみること。
- ⑤ 遺物や遺跡から古い時代の生活文化を考察する考古学のように、人間の発達における他者の存在の重要性を歴史的に考察すること。

問6 傍線部C「見られていなければ、『社会的に』起こっていないのも同じである」とあるが、これを言い換えたものとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 解答番号は **12**

- ① 子どもの頃から大人にその成長を見守られていないと、社会性が身につかないということ。
- ② 他者の視線がない状況での行為は、社会と関わりがないため、意味をもたないということ。
- ③ 他者からの評価という重要な報酬が伴わない行為は、社会で誰も行わなくなるということ。
- ④ 他者から見られていないと、人間は社会的な認知プロセスを発展させられないということ。
- ⑤ 子どもにとって見られていない状況は、何をやってもいいという状況を生み出すということ。

問7 傍線部D「コメディ番組で、笑い声を音声として入れておくと、視聴者もまた笑いやすくなる」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 解答番号は **13**

- ① 人間は、他者からの評価を何よりも重要な報酬として認知プロセスを発達させてきたにせよ、「笑い」においては他者と同じであることをとても重視し、他者が笑っていることに同調しようとする意識が働くから。
- ② 人間の脳は、生まれ落ちた時から、生きるうえで重要な報酬が得られるように、神経回路網のつなぎかえを行っているが、他者とともに笑うという行為は、自分が所属する社会で評価される行為であることを学習しているから。
- ③ 人間にとって、笑うという行為は、他者に見られることによってはじめて意味を持つ行為であるため、笑い声の音声は、コメディ番組を見ている自分を、主観からはなれて客観的にとらえることを可能にするから。
- ④ 大人になっても、笑うことは泣くことに比べれば頻繁にあることから、他者の笑い声に反応する脳の神経回路網が、他の行為よりもしつかりと学習されているから。
- ⑤ 笑いという行為は、人間にとって他者との関わりの中でこそ意味をもつものであり、他人がいるという状況において、はじめて笑うという行為に及ぶため、一人で番組を見ている場合でも、他者の存在を感じることが出来るから。

問8 空欄

X

 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は

14

- ① 自己という「同一性」は、他者との関係性によって生み出されるものである
- ② 自分が何者であるかという認識は、他者の中にあるのであり、自己の中にはない
- ③ 他者の目を強く意識する日本では、自己認識を確立することはとても難しい
- ④ 私たちにとって、自己という「同一性」は、他者と同一であることと同じ
- ⑤ 他者の視線を徹底的に意識することで、唯一無二の「本当の自分」が生まれる

問9 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 解答番号は

15

- ① 人間の場合、何が生きるうえでもっとも大切な報酬かは、自分が所属する社会の構成員である他者からどのように評価されるかということであるが、これは、人間が自然との共生を忘れ、自然環境を破壊しながら文明を築いてきた証でもある。
- ② 人は、常に何者かである「ふり」をしているが、それは幼児期からの、他者からの評価を何よりも重要な報酬として認知プロセスを発達させてきたことによる。
- ③ 泣くという行為は、母親など、周りの大人に助けてもらいたい、なくさめてもらいたいからであり、子どもは成長する過程で、泣くという行為を計算して実行するようになる。
- ④ 他者からの否定的な評価は、自分の存在をおびやかす脅威となるが、このように「他人と違う」ことが気になるのは、他者の目を比較的強く気にすることが日本人の特徴だからである。
- ⑤ 私たちは、成人した後は多かれ少なかれ「本当の自分」という個が確立していると考えがちであるが、それは幻想であり、他者からの否定的な評価によって、個々の心的態度がおびやかされ、関係性の数だけ自分があるという状況に陥っている。

第2問 次の文章を読んで、後の問い（問1～9）に答えよ。

集団の根幹をなす四つの柱、裁き、学び、癒し、祈りのための制度というのは、いずれも「おのれの尺度を超えるもの」とどう応接するかという作法にかかわります。裁きは「神々の声」として現象する集団の「訓戒的」な規範を聴き取ることです。学びはおのれの手持ちの価値の度量衡では考量し得ぬものに近づくことです。癒しは「誕生と死」という人間世界と「その向こう側」とのインターフェイスに立つことです。祈りは人知の及ばぬもの、人語を以ては語り得ぬものと先入観を廃して向き合うことです。いずれも人間的な世界と非人間的世界の「あわい」にかかわる営みです。

この「グレーゾーン」には専門的知見を備え、そのために心身を整えたものが立たなければなりません。人間の賢^{さか}しらが「人間が入ってはいけないエリア」に踏み込むことを制止し、反対に「非人間的なもの」が人間の世界に侵入して、人間的秩序を壊乱することを食い止める。そのためにこの境界線には裁き人がおり、教師がおり、医療者がおり、聖職者がいる。僕はそういうふうと考えています。そして、この境界線を守る人たちのことを「歩哨^A」(センチネル, sentinels)と名づけています。人間たちを「オフリミット」の向こう側に転落しないように見張ると同時に、外部から人間の世界に侵入してくるものをも見張る。双方向について境界線を守る人たちのことです。

太古において最初の人間集団が形成されたとき、最初の野営地でまですしたことは「境界線を守る人」を指名したことだと思っています。寝ずの番をする人たちを何人が指名した。仲間の誰かが夜の闇のなかに引きずり込まれないように、夜の闇から「何か」が入り込んでこないように。実際に天候の急変や野生獣の来襲や異族の攻撃といった具体的な危険が想定されていたからというだけでなく、「人間の住むことのできる人間の世界」と「その外側」を切り分けるという象徴的な^テ判^レイとして「歩哨^{ほしやう}を立てる」ことは必須だったのだらうと思います。歩哨というのは十人のグループに一人くらいいれば十分です。全員が歩哨である必要はない。でも、誰も歩哨に立つ人がいないと、集団は存続できない。

サリンジャーの『キャッチャー・イン・ザ・ライ』で主人公のホールデンは「ライ麦畑のキャッチャー」になりたいのだと妹に話し

ます。幼い言葉づかいですけど、ホールデンはここでたぶん「歩哨」の仕事のことを言っているのだと思います。

だだっぴろいライ麦畑みたいところで、小さな子どもたちがいっぱい集まって何かのゲームをしているところを、僕はいつも思い浮かべちゃうんだ。何千人もの子どもたちがいるんだけど、ほかには誰もいない。つまりちゃんとした大人みたいなのは一人もいないんだよ。僕のほかにはね。それで僕はそのへんのクレイジーな崖がけつぶちつぶちに立っているわけさ。で、僕がそこで何をするかっていうとき、誰かその崖から落ちそうになると、かたっぱしからつかまえるんだよ。つまりさ、よく前を見ないで崖の方に走っていく子どもなんかいたら、どっからともなく現れて、その子をさつとキャッチするんだ。そういうのを朝から晩までずっとやっている。ライ麦畑のキャッチャー、僕はただそういうものになりたいんだ。

「キャッチャー」は「ちゃんとした大人みたいなもの」が担う仕事です。子供たちは「クレイジーな崖つぶち」に向かつて無防備に走ってきます。それをさつと「キャッチ」する。でも、子供たちは自分が助けられたことに気づかないで、そのまま走り去ってしまいます。「ありがとう」も言わずに。でも、「キャッチャー」はそんなことは気にしない。それが歩哨という仕事だからです。

歩哨が立っていたおかげで実は「歩哨がいなければ起きたかもしれない」無数の災厄が回避された。でも、誰もそれを知らない

(I)。歩哨自身も自分がそれほどの功績を果たしたことを知らない。「何もなかったよ」と報告して「はい、

ご苦労さん」と言われて終わりです（それさえ言われなくてもいいかも）。でも、そのような歩哨たちの、称賛によって報われることのない奉仕によって集団の安寧は保たれている。

僕が「歩哨」と呼んでいるのは、何かを創り出すものではありません。集団を定常的に保つのがその機能です。存続させることが最優先かつ唯一の課題であって、それ以外のことはとりあえずどうでもいいんです。でも、このような「集団を定常的に保つ働き」の重要性が今の社会では忘れられているように僕には思われます。人々はむしろ成長すること、ゾウシヨクすること、拡大することが集団の本義だと思っている。だから、集団を同一的な状態に保つとする歩哨たちをむしろ憎み始めています。邪魔なんです。歩哨たちはいわば集団の惰性を人格化したものですから。「成長か死か」というような狂躁的なスローガンで浮き足立っている人たちから見ると、司法も教育も医療も宗教もさっぱり社会の急激な変化に対応していない。それが許せない。政治イデオロギーのシヨウチヨ

ウや市場の株価の高下に即応して II 的にすべての社会制度が変化することが端的に「よいこと」だと彼らは信じているからです。

でも、これはほんとうに愚かな考え方だと思います。人間が共同的に生きてゆくためには「急減には変化しない方がよいもの」がたくさんあります。政権交代や株の値動きみたいな落ち着きのないものに連動させてはならないものを経済学者の宇沢弘文^{ひろふみ}先生は「社会的共通資本」と名づけました。それなしでは人間が共同的に生きてゆくことのできないものとして宇沢先生は三つのカテゴリーを挙げています。

ひとつは自然環境です。大気、海洋、河川、湖沼、森林、土壌、こういったものは人間が生きていく上で必要不可欠なものです。これは何があっても定常的に維持しなければなりません。二番目は社会的インフラ。交通、通信、電力・ガス・上下水道といったライフラインです。そして、みつつめに挙げられているのが宇沢先生が「制度資本」と呼ぶものです。司法、行政、教育、医療などの社会制度がそれです。宗教は宇沢先生のリストには入っていませんが、僕は「祈りのための場」は社会的共通資本にカウントしてもいいのではないかと思っています。

宇沢先生はこう書かれています。「社会的共通資本は決して国家の統治機構の一部として官僚的に管理されたり、また利潤追求の対象として市場的な条件によって左右されてはならない」

政権が交代するたびに教育や医療のシステムが変わっては困る。海洋や森林が私企業や個人によって私有されて、勝手に売買されたり、乱開発されては困る。社会的共通資本というのは個人の恣意^{しゐい}にも、政治イデオロギーにも、市場の需給関係にもかかわりなく保全されなければならない。

別に、個人の恣意はつねに邪悪であるとか、政治イデオロギーはつねに偏向しているとか、市場はつねに間違うとか、そういうことを言っているわけではありません。そうではなくて、社会的共通資本は急激な変化を愛好する仕組みに組み込まれてはならないということです。政治過程や経済過程はわずかな入力差が大きな出力差を生み出す複雑系です。ひとつの「*レバレッジ」を噛^かませるだけで地球的な規模でものが創り出され、破壊される。そのような不安定なシステムに「それなしでは人間が生きてゆけないもの」は委ねてはならない。大衆がどのような政治勢力に多数派を与えるか、投資家がどの株を買うかは予測不能です。そして、いずれもわずかな入力の変化が巨大な*カタストロフを生み出すことがある。「そういうシステム」に、海や大気や、ライフラインや司法や行政や医療や教育

を委ねてはならない。そういうたいせつなもの、入力変化に対する感応の遅い、惰性の強いシステムに委ねなければならない。

社会的共通資本は「職業的専門家によって、専門的知見にもとづき、職業的規範にしたがって管理・維持されなければならない」と宇沢先生は書かれています。政治イデオロギーと市場は社会的共通資本には関与してはならない。「それがなくては生きてゆけないもの」を私党や私企業が独占的に管理することは許されない。

十数年前、ボリビアで水道の経営を民間に「マイジョウ」したことがありました。水道会社は収益を確保するために水道料を値上げし、それはついに労働者の最低賃金の二五パーセントに達しました。そして、住民暴動が起き、政府軍との衝突で多くの死傷者が出た後に再び公営事業に戻されました。そのときに発せられた「水と生活を守る宣言」にはこういう文言があります。

「水は大地と全ての生物のものにして神聖にして犯す事ができないものであり、全世界の水資源は温存され、営繕され、保護されて子孫に伝えられ、その自然の状態が尊重されなければならない。水は人間の基本的な権利であり全ての政府機関によって公共性が保証されなければならない。すなわち、金儲けの手段になったり、民営化されたり、商業的に取引されてはならない」

この宣言は社会的共通資本の性格を正しく定義していると思います。人間にとって最もたいせつなものは「温存され、営繕され、保護されて子孫に伝えられ」なければなりません。それを利用して政治的権力を行使したり、それを利用して金儲けをすることは許されません。それはいくぶんかは「人間の世界」に属しているけれど、やはりいくぶんかは「人間の手の届かない世界」に属するものだからです。ですから、それを管理する人たちは人間的領域とその外部の「あわい」に立つという職能に「セイツイウ」していなければならない。これらの仕事もまた「歩哨」の責務だということになります。

- a そのことを忘れてはならないと思います。
- b そうではなくて政治と市場は「変化が速い」ということが問題なのです。
- c 人間が集団として生きていく上で必要不可欠な制度のうちには決して政治と市場が関与してはならないものがある。
- d 変化することそれ自体から推力を引き出し、生産性を引き出す、そういうプロセスなんです。
- e 別に僕は政治家は全員邪悪であるとか、ビジネスマンは全員強欲であるとか、そんなことを申し上げているわけではありません。

高い支持率を誇った政治家がたちまち失墜するというのは当たり前の光景ですし、去年時価総額を誇った会社が今年に赤字にまみれているというようなことは日常茶飯事です。今年起業した株式会社のうち一〇〇年後に残っているのは一パーセントもないでしょう。そういうふうにも始まりません。

III

わけです。変化から生命力を引き出すシステムがそういうものであることに文句を言っ

しかし、IV 的に変化してはならない制度もある。定常的であることが基本で、よほどのことがない限りは変化しないような惰性の強い制度が僕たちの生きていく社会の基幹部分をなしている。家の土台と一緒です。インテリアや電飾や鉢植えはいくら換えでも構わない。毎日変わった方がうれしいという人だっているかもしれない。でも、毎日を壊して、毎日土台を変えるわけにはゆきません。社会的共通資本というのはそういうものです。社会の土台になるものです。それは軽々に変えてはならない。それは「歩哨」が守らなければならない。そして、現代日本が直面している最も深刻な問題のひとつは、社会を支えるこの四つの制度資本がいずれも政治と市場の激しい攻撃にさらされて、崩れかけていることです。

《注》レバレッジ……てこの作用

カタストロフ……悲劇的な結末

(内田樹『日本霊性論』より)

問1 カタカナで書かれた(ア)～(オ)の傍線部の漢字と同じ漢字を含むものを、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は(ア) 、(イ) 、(ウ) 、(エ) 、(オ)

(ア) ギ^レイ

- ① 昆虫の見事なギ^レタイにだまされた。
- ② 戦争のギ^レセイとなる。
- ③ 彼はとてもしチギ^レな人だ。
- ④ キヨギ^レの申告をする。
- ⑤ 国民としてのギ^レムを果たす。

(イ) ゾウシ^レヨク

- ① 自分のシヨク^レムに専念する。
- ② トキのハンシヨク^レに成功した。
- ③ 緑のプロジェクトでシヨク^レリンが進められた。
- ④ さらさらとしたシヨツ^レカクだ。
- ⑤ 一年間、仕事をイシヨク^レする。

(ウ)

シヨウチヨウ

- ① 今後のキシヨウ情報に注意してください。
- ② シヨウソウの念にかられる。
- ③ マスクの着用がシヨウレイされている。
- ④ 貿易品目をめぐり、外国とセツシヨウする。
- ⑤ 彼からのシヨウソクが途絶えた。

(エ)

イジヨウ

- ① お互いにジヨウホして妥結をみた。
- ② ニチジヨウ的に行われていることだ。
- ③ ゲンジヨウは思わしくない。
- ④ ジヨウチヨウな説明に飽き飽きする。
- ⑤ 河川水をジヨウカして飲料水とする。

(オ)

セイツウ

- ① 彼女はとてもセイジツに物事に取り組む。
- ② 撰関家となってケンセイをふるう。
- ③ 十周年記念をセイダイに行う。
- ④ セイシン論では解決ができない。
- ⑤ 部屋をセイケツに保つことが大事です。

問2 傍線部A『歩哨』（センチネル、sentinel）と名づけています」とあるが、この「歩哨」の責務の一つに挙げられているものとして適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 解答番号は 21

- ① 人間が共同的に生きてゆくため市場の原理に任せられないものが、自然環境や交通、通信、電力・ガス・上下水道といったライフラインや、司法、行政、教育、医療であることをよく理解していること。
- ② 金儲けの手段になったり、民営化されたり、商業的に取引されてはならない社会的共通資本を管理するために、人間的領域とその外部の「あわい」に立つという自身の仕事をよく理解していること。
- ③ 「ちゃんとした大人みたいなもの」として、「クレイジーな崖っぷち」に向かって、無防備に走ってくる子供たちを、さつと「キヤッチ」し、自分が存在しなかったならば起こったであろう、無数の災厄を回避すること。
- ④ 「集団を定常的に保つ働き」というものが、現代社会においても意義のあるものであることを理解し、政権交代や株の値動きのような、変化が速く落着きのないものを集団から排除すること。
- ⑤ 人間にとって最もたいせつなものは、いくぶんかは「人間の世界」に属しているが、いくぶんかは「社会全体で共同で管理すべきもの」であるから、それらを温存し、営繕し、保護すること。

問3 空欄

I

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 22

- ① なにしろ、災厄は起きなかったのですから
- ② 歩哨は、実際に見えるものではないですから
- ③ 子供の社会はどんどん変化していきますから
- ④ 歩哨が立つのは、人知の及ばない領域ですから
- ⑤ 歩哨の仕事は言葉で語り得ないものですから

問4 傍線部B「集団を同一的な状態に保とうとする歩哨たちをむしろ憎み始めています」とあるが、人々が歩哨たちを憎み始めて
いる理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 23

- ① 現代では、天候の急変や野生獣の来襲や異族の攻撃といった具体的な集団の危険は想定されていないから。
- ② 裁き、学び、癒し、祈りのための制度が、いずれも科学的な根拠に基づいたものではないと考えているから。
- ③ 集団の拡大にとって利する何かを、歩哨の役割を担う人々が、創り出さないことを不満に思っているから。
- ④ 政治イデオロギーや株価に即応して、すべての社会制度が変化することが「よいこと」だと信じているから。
- ⑤ 集団を定常的に保つことよりも、集団に属する個人々の利益を拡大することが大事であると考えているから。

問5 空欄

II

IV

には同じ四字熟語が入る。文脈から考えて空欄に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 24

- ① 我田引水
- ② 因果応報
- ③ 一刻千金
- ④ 朝令暮改
- ⑤ 明鏡止水

問6 傍線部C「社会的共通資本は決して国家の統治機構の一部として官僚的に管理されたり、また利潤追求の対象として市場的な条件によって左右されてはならない」とあるが、その理由として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 25

- ① 官僚的な管理は一律的で変化に対応できず、利潤追求は奉仕の精神で管理が必要な社会的共通資本にふさわしくないから。
- ② 大気や海洋、河川などは、人間が生きていくうえで基本的な権利で、地球全体の共通財産であることがはっきりしているから。
- ③ 社会的共通資本に「祈りのための場」を含める以上、現代の社会においては政教分離の原則に立つことが必要だから。
- ④ 大衆がどのような政治勢力に多数派を与えるにせよ、その判断はたいていの場合、惰性であり、誤りであるから。
- ⑤ 国家の統治機構や利潤追求の市場原理は、わずかな変化が社会に大きな影響を与える可能性のある不安定なシステムだから。

問7 本文 の中のa～eの文の意味が通るように並べたものとして、最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 26

- ① c | a | e | b | d
- ② c | b | e | d | a
- ③ c | e | a | b | d
- ④ e | a | b | d | c
- ⑤ e | d | c | b | a

問8

空欄

Ⅲ

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は

27

- ① 政治やビジネスの世界にも、「歩哨」の役割が必要になる
- ② 政治や市場は、人間にはコントロールができないものである
- ③ めまぐるしい栄枯盛衰を生きるのが政治であり、市場である
- ④ 変化が速い政治や経済は、社会の土台になるものではない
- ⑤ 政治家やビジネスマンは、拡大することに価値があると考ええる

問9 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

解答番号は 28

- ① 集団の根幹をなす四つの柱である、裁き、学び、癒し、祈りのための制度は、いずれも「おのれの尺度を超えるもの」とどう応接するかという作法にかかわり、人間的な世界と非人間的世界の「あわい」にかかる営みであるが、その境界に立ち、歩哨の役割をするものの減少により、崩れかけている。
- ② 人間が、「人間が入ってはいけないエリア」に踏み込むことを制止し、「非人間的なもの」が人間の世界に侵入して、人間的秩序を壊乱することを食い止めるために、専門的な知見を備え、そのために心身を整えたものが、双方向について境界線を守り、集団を同一的な状態に保つことが必要である。
- ③ 歩哨の役割は、集団を定常的に保つことであるが、歩哨としての立場にある者は、自らの仕事を誰にも気づかれないように行うことが必要であり、集団の安寧を保つことを第一の目的として、自らの利益を求めたり、賞賛によって報われることを求めたりすることがあつてはならない。
- ④ 人間は、太古の時代から自分達の集団を拡大させることを目的として歩哨を立ててきたが、政治や市場原理のような変化すること自体から推力を引き出すシステムが登場したことで、集団を同一的な状態に保つことができなくなり、集団の存続自体が危うくなつてきている。
- ⑤ 社会的共通資本とは、ちょっとした違いが、大きな結果の違いを生むシステムであり、一歩間違えると地球的な規模でものが創り出され、破壊されることから、それを利用して政治的権力を行使したり、それを利用して金儲けをすることは許されず、「人間の手の届かない」世界にとどめておくべきものである。

